



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1992 発行所 財団法人精道教育促進協会 〒659兵庫県芦屋市船戸町1-2-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

王たるキリストに従う

1 宇宙の王たる主イエズス・キリストの祭日に当り、こ

こでこうして司牧者として皆さんにお目にかかれるのは、大きな喜びです。今日は典礼暦年最後の日曜日、教会に集う私たちが、年間を通じて主イエズス・キリストの生涯とその秘義を思い起し、再現してきた一年を締めくくる日です。

旧約・新約の朗読を通して、典礼は私たちがイエズスの王権の黙想へと招きます。イエズスは、私たち一人ひとりに最も近い事柄をも含め、人類史上の現実全てを支配しておられます。

2 福音史家ヨハネの記したイエズスの受難のエピソード

は、この王権の一面に注目しています。いかにも贖い主らしいイエズスの王権の特性を見ることができま

受難の前に、最後の公の説教でイエズスは、「私は地上から上げ

られて、すべての人を私のもとに引き寄せる」と言われました。福音史家は続けて、「と言われたのは、ご自分がどんな死に方をするかを示されるためであった」(ヨハネ12・32・33)と述べています。イエズスは十字架のことを考えておられたのです。それは、ご自分を信じる全ての人々を治めるためにつくべき「王座」でした。ローマ総督ピラトはイエズスに、「あなたはユダヤ人の王か」(ヨハネ18・33)と尋ねます。イエズスは肯定して、さらに詳しくお答えになりました。「あなたの言うとおり私は王である。私は真理を説明するために生まれ、そのためにこの世に来た。真理につく者は私の声を聞く。」(ヨハネ18・37)

それから、間もなく、イエズスは十字架上で息を引き取られました。しかし、敗北と見えたのは、実は悪の支配下にあるこの世に對

43

3 イエズスはまことの王です。その王国はこの世にありません。

がら、この世のものではありません。イエズスは、真理につく人々、御声を聞く人々、光の子として歩み、止むことなく闇の王国と戦い続ける人々全ての王なのです。黙示録には、キリストはアルファとオメガ、最初で最後、初めてであり終りである方、雲に乗ってこられ、キリストを刺し貫いた者たちを含め全ての人が主を見上げるこ

とになる、と記されています。主は私たちが愛し、またその御血によって私たちが罪から解放し、父なる神の王国の民としてくださいます。

私たち一人ひとり、キリストの王権を受け入れるか拒否するか、自由に選ぶことができます。私たちはすでに、洗礼の時の約束によって「はい」と答えているのですが、

4

4 (…) 今日、司祭たちと人々の間の対話をますます盛んにする必要があります。

日々、その約束を新たにするか、破り捨てるか、主イエズスの前にひざをかがるか、イエズスをはねのけて十字架にかけるか、どちらかの選択を迫られています。本日の典礼は、主の王権への私たちの自発的で完全な服従を確認する機会であり、主の王国を力強く世界に広めるため力を尽すよい機会となります。イエズスは「私はかわく」と仰せになり、人々をご自分のもとに導いてくるよう、私たちに求めになります。

「心を上げよ、主に向かって心を上げよ！」 そうです！ 私たちも王である主に心を上げましょう。初代のキリスト教共同体は、一つの言葉に主イエズス来臨の希望を込めて、繰り返し唱えました。マラナ・タ：主イエズス、来てください、と。

おいでください！ この一年間、あふれる恵みをいただいた私たちは、恩寵の完成を待ち望んでいます。御国の来たらんことを。「真理と生命の王国、聖性と恩寵の王国、正義と愛と平和の王国」が私たちのうちに。アーメン。(九一・十一・二四)

聖人と私たちの希望

「考えよ、御父から計りがたい愛を受けたことを。」(Iヨハネ3・1)

今日と明日、私たちは古いカンポ・ペラノとこの新しいプリマ・ポルタという二つの墓地を訪れます。皆さんと共にこの新しい墓地を訪ねるのは今回が初めてです。

世界中どここの町や村にも多くの墓地がありますが、本日は聖ヨハネの第一の手紙の一節、御父から受けた愛について語る言葉が全ての墓地で聞かれるでしょう。この言葉は、地上のある特別の場所に向けられています。墓地は

人間の死について、「人間は一度だけ死んでその後審判を受けると定められている」(ヘブライ9・27)というその定めについて語っています。

そうです、墓地は死について語ってくれます。死が人間の逃れ得ぬ定めであること、この世での存在につきまとうことを、どの墓地も、今いるこの墓地も、そのことを証言しています。私たちの親族、友人、近い人、遠い人、知人、未知の人たちの死について語っています。私たちは、暇にまかせてここへ来た無関心な訪問者ではありません

せん。一人ひとり、度合いは異なっても、亡くなった人々の記憶や思い出を抱き、心の底に消えない悲しみを刻みつけられているからです。



「考えよ、御父から計りがたい愛を受けたことを。」

諸聖人を記念するこの日、教会は私たちに語りかけます。聖人たちは？ それは、御父がその御独り子において私たちに注がれた永遠の愛を証する特別な証人です。黙示録によれば、聖人とは「大きな艱難を抜け出て、小羊の血で自分たちの服を洗って白くした」(7・14)人々です。

聖人たちが死の定めを免れてはいませんが、キリストから来る命の力によって上げられたのです。彼らは「神の子と称され」、神との永遠の交わりの内に実際に、また完全に神の子なのです。(1ヨハネ3・1参照)



この世は聖人たちを知りません。(同参照) 聖人たちが死の限界を超えてあずかる命を知らないのです。この命は神の内にキリストと共にあり、目に見えないもの、感覚で捉えられるものを超えています。人間の知識が及ぶ、この世の全てのものを超えています。このような命は、神が三位一体の神的生命において秘義である如く、秘義であると言えます。

神の命と同じく、神における聖人たちの命も、信仰の秘義の一部となっています。この秘義は、地上のほかならない姿をまもってはいま

すが、行く手は神へとつながっています。「私たはいま神の子である。後にどうなるかはまだ示されていませんが、それが示されるとき、私たちは神に似た者になることを知っている。私たちは神をそのまま見るであろうから。」(1ヨハネ3・2)

私たちの前には死者の眠る墓地があります。思い出と、人の心の悲しみの墓地が。しかし、私たちの信仰の墓地、本日教会が祝う諸聖人の墓地もあるのです。これから私たちが思い起そうと

マリアを黙想すれば キリストがわかる(2)

神学者がマリアの処女性という教会の教えを提示する

時には、事実の叙述と意味の解釈との間にバランスを保たせることがどうしても必要です。どちらも秘義には不可欠の要素です。出来事象徴的な価値すなわち意味は現実に基づくのに対し、事実はその象徴する意味が解き明かされて初めて本来の豊かさが明らかにされるのです。

神の御母の処女性への信仰を表明することによって、教会は次のことを宣言します。

- ナザレトのマリアが実際に聖霊の力によって、人間の介入なしにイエズスをみごもったこと。
- マリアは出産の時も産後も処女

する人々もみな、小羊の血によって贖われているのです。御父はその人たちが全員に、御子の愛をお与えになりました。事実、神は全ての人をご自分にかたどって造り、人が神にならって永遠の命に入り、神を「ありのままに」見るよう望まれます。これこそ、私たちが信仰に励まされ、希望を抱いて墓地を訪れる理由です。



この希望は、ここローマと古代世界の各地に、使徒たちとキリストの最初の弟子たちの手でもたらされました。それは私

のままであったこと。この問題を取り上げた教父たちや公会議によると(前述のマンシンの著書と第十六回レド教会会議のクレド参照) 肉体の完全性に関する全体的なことについても同様であったこと。

●イエズスの誕生後もつねに完全な処女性を保ち、救いの最初の段階で同じく重大な役割を担うべく召された聖ヨセフと共に、御子の生涯とみわざへの奉仕に自らを捧げつくしたこと。(第二バチカン公会議、教会憲章56番)



今日、教会はキリストが処女から生れたことを思い出さなければならぬと考え、ルカ福音書1・26-38、マテオ1・18

たちを当時の墓地へ、祈りと集いの場所であったカタコンブへとつないでいます。初代のキリスト信者たちは、まことの神を知らず敵意に満ちた異教世界の迫害に耐えて、殉教者の墓所の近くに集い、聖体を祝ったのです。

こうして古代ローマの墓地は聖なる場所となり、新しい意味を帯びるようになりました。御父がイエズス・キリストによって、私たちに注がれた愛を証言し始めたのです。イエズスは永遠の御子、私たちの兄弟となられた方です。全

25の記述を、信者たちにキリストの神性を信じやすくさせるための単なるエピソードと考えることはできないと指摘しています。それらはマテオやルカの用いた文学類型である以上に、使徒たちに由来する聖書の伝統を引いた表現なのです。

キリストの処女懐胎を確認するとは、理性で考えても疑う余地のないような証拠が見つかるという意味ではありません。実際、処女懐胎は神の啓示された真理であり、人間は信仰の服従(ローマ16・26)を通して受け入れるべきものです。神がこの現実の中で働かれること、神と共にいれば「できないことはない」(ルカ1・37)ことをすすんで信じる人だけが、深い感謝の心をもつて、神の永遠の御子が謙遜に自らを無とし、処女からお生れになったこと、御子の十字架の上の死と、十字架の木の上げら

被造物の長子であり、死者の中から最初に生れた方(コロサイ1・15、18参照)です。それは私たちが神における豊かな永遠の命を(ヨハネ10・10参照) 得ることができ

親愛なる皆さん、このように考へ、また信じつつ、聖体祭儀を祝いましょ。亡くなった愛する人、信仰と希望のうちに先にこの世を去った全ての人々、世界中のあらゆる墓地に憩う人々のために祈りながら。(九一・十一・一、ローマの公共墓地での御ミサにて)



しかし、事実を確認することができず、神学者のなすべきことが終るわけではありません。前にも言ったように、救いのできごとにはひそむ象徴的な価値を見出し、研究し、説き明かさなければなりません。つまりメッセージを筋道立てて説明し、キリストの処女懐胎とマリアの永遠の処女性という事実を通じて示される神の姿を解き明かさねばならないのです。従って、神学者は問いかけるべきです。

「これらのできごとを通して神は、御父と御子と聖霊は、何をお話しになつて居るのか。」 事実、贖いをもたらす託身という出来事において、神の三つのペルソナが自らを啓示し、働きました。御父は「独り子を与えたもうほこの世

説教・講話・書簡等の抄訳

を愛され(ヨハネ3・16参照)、御子は人間の本性を取って私たちの兄弟となり、聖霊は処女を覆いました。ルカ福音書では、神は超越した存在でありながらも私たちの近くにおられ、力強いと同時にあわれみ深く、全てに先立ち、報いを求めない愛であること、ダビドと結んだ契約と約束を守り、人間の惨めさを憐れみ、貧しい人や謙虚な人を特別に愛する御方としてご自分をお示しになります。

「これらの出来事は、旧約・新約両方の段階で、教会に関してどのようなことを私たちに教えてくれるだろうか？」 マリアへのお告げの場面が「イスラエルの完成」、新しい神の民の原型として示されているのを見る時、こう問いかけずにはいられません。

「これらの出来事は、男女を問わず人間について、また人間を待っている恩寵と栄光について何を教えてくれるだろうか？」 まさにこれらを通して「不死の与え主、みことば」(聖イレネオ「異端論駁」III,16)が世に來られ、神化された人間は再び神との親しい関係に戻る道を開かれました。またこれらの出来事によって、「男と許婚である処女」ナザレトのマリアは体と靈魂共々、自らの全てに関係のある事柄の中心にいることになりました。そしてここでは自由と従順、謙遜と賞賛、愛と奉仕、神への忠実と人間との連帯が、見事な調和を保って結び付いているのです。(次号に続く)

教会は司祭的共同体

教会シリーズ 9

1 ペトロの手紙、パウロの手紙、そしてヨハネの黙示録に記されているように、「すべて人間のの中から選ばれた大司祭」(ヘブライ5・1)である主キリストは、「新しい民」を「父なる神のために」、「司祭の王国の民」(黙示録1・6、5・9、10参照)となさいました。こうして神の聖性と「交わり」が実現したので、それは主が古いイスラエルに要求し、新しいイスラエルにはさらに強く要求されたことでした。

「おまえたちは聖なるものであれ、主なる神、私が聖なるものだからである。」(レビ19・2) 神の聖性と「交わり」がキリストの贖いの犠牲の実りとして実現し、その結果、「私たちに与えられた聖霊によって、この心に注がれる」(ローマ5・5) 神の愛にあずかることができるようになります。私たちが「聖なる司祭職」が実現したのです。ペトロが述べるように、「イエズス・キリストによって神にのみされる霊のいけにえをささげる」(1ペトロ2・5) こと、「聖なる司祭職」にあずかることができるようになりました。このように考えれば、続いて説明する意味での司祭的共同体を教会

2 第二バチカン公会議はペトロの第一の手紙を引用して次のように述べています。「洗礼を受けた者は、再生と聖霊の塗油によって、霊的な家および聖なる司祭職となるよう聖別される。それは彼らがキリスト信者のあらゆるわざを通して霊的供え物を捧げ、やみから自分を感じ嘆すべき光へと呼んだ方の力を告げる者となるためである。(1ペトロ2・4、10参照) (教会憲章10番) 公会議の教えによると、神に栄光を帰するキリスト信者の祈りは、「神に喜ばれる生きた聖なる供え物」(ローマ12・1参照)として自分を捧げること、キリストを証しすることと結びついています。かくして洗礼を受けた人すべての召し出しは、司祭・預言者・王であるキリストの救い主としての使命にあずかることであるということになります。

3 信者の共通司祭職とも言われるキリストの司祭職への全信者の参与について、公会議は職位的司祭職との特別の関連のもとに述べています。「信者の共通司祭職と職位的または位階的司祭職とは、段階においてだけでなく、本質において異なるものであるが、

相互に秩序づけられていて、それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の司祭職に参与している。」(教会憲章10番) 「役務、聖務」としての位階的司祭職は特別の奉仕です。なぜならそれによって信者の司祭職が実現し、教会がキリストの賜のうちに「司祭的共同体」として実るからです。「信者の中から選ばれて聖なる叙階を受ける者は、神のことばと恩恵をもって教会を牧するため、キリストの名において立てられるのである。」(教会憲章11番)

4 ここで、信者の司祭職と職位的(位階的)司祭職は相互に秩序づけられていることが強調され、それらは「段階においてだけでなく」(教会憲章10番)本質において異なっていると述べられています。位階的(職位的)司祭職は信者の司祭職の「産物」でも、信者の共同体によって委任あるいは選出されたものでもありません。それは神の特別の召し出しです。「アロンのように神に召された者の他、この誉れを自分で受けることはできぬ。」(ヘブライ5・4)キリスト信者は、特別の秘跡つまり叙階の秘跡を通して、この役務を授かるのです。

5 「職位的司祭は、自分が受けた聖なる権能をもって司祭的な民を育成し、治め、キリストの代理者として聖体の犠牲を執り行い、それを民全体の名において神に捧げる。」(教会憲章10番) この点は司祭の役務と生活に関

する教令にさらに詳しく述べてあります。「しかし同じ主は、信者たちが一つの体に結合するように、信者の中のある人々を役務者に制定した。この体の中では「すべて」の構成員が同じ働きをするのではない」(ローマ12・4)。役務者は信者の社会において、いけにえをささげ、罪を赦すために、叙階の聖なる権能を持ち、また人々のためにキリストの名において公に司祭としての務めを行う。(…)この秘跡は、聖霊の塗油によって特別な霊印を司祭にしろし、こうして、司祭はかしらであるキリストの代理者として行動できるように、司祭キリストの姿に似たものとなる。」(司祭の役務と生活に関する教令、2番。神学大全III, q. 3, a. 3参照) 司祭は霊印(印章)と共に、その使命を果たすための恩寵も授かります。「司祭はその職分に応じて使徒の任務に参与する者であり、神から恩寵を授けられて、諸国民の中でキリスト・イエズスの役務者となり、諸国民が聖霊において聖化された快い供え物となるように、福音の聖なる任務に従事する。」(同2番)

6 このように、位階的(職位的)司祭職は、教会内で信者の司祭職の源となるように定められました。公会議はさまざまなおとところで司祭職について述べていますが、特に聖体を祝う集いについて述べるときに説明を加えています。「彼らはキリスト教生活全体の源であり頂点である聖体の犠

